

# 新教育運動における心身論の来歴

## — 時代精神の地平から —

伊 藤 敏 子

### Mind-Body Theories in New Education

#### — The Relation to Contemporaneous Philosophy and Medicine —

Toshiko ITO

#### Abstract

In the Platonic mind-body dualism, body is considered subordinate to mind, and is sometimes regarded as a threat to the mind. However, many educators in the spirit of New Education and other reformist contemporaries followed Friedrich Wilhelm Nietzsche (1844–1900), who rejected this dualism and conceived of mind and body as a whole. Thus, mind-body theories in New Education derive, as has often been pointed out, from philosophy, especially the philosophy of life. However, they also descend from medical thinking. Paul Geheeb (1870–1961), a representative of the German Landerziehungsheim movement, worked at an educational institution for psychopathic children in his youth, and enthusiastically attended the lectures on neurology and psychiatry held by Otto Binswanger (1852–1929) and Theodor Ziehen (1862–1950) at Jena University. Peter Petersen (1884–1952), the originator of Jena-Plan, was influenced by the biologist Hans Driesch (1867–1941). Their mind-body theories, based on contemporaneous medical thinking as well as philosophy, had a tendency to emphasize organic wholeness, a doctrine which was easily integrated into the policies of National Socialism.

## 1. はじめに

書店の哲学コーナーは新しい身体観ないし肉体観に立って人間の生を読み解く書籍で溢れている。その代表的なキーワードを一瞥してみただけでも、ドゥルーズ (Gilles Deleuze, 1925–1995) の「器官なき身体 (corps-sans-organes)」、デリダ (Jacques Derrida, 1930–2004) の「コーラ ( $\chi \acute{\omega} \rho \alpha$ )」、アガンベン (Giorgio Agamben, 1942–) の「ホモ・サケル (Homo Sacer)」および「剥き出しの生 (nuda vita)」、ジジェク (Slavoj Zizek, 1949–) の「身体なき器官 (organs without bodies)」、ときわめて多彩である。身体観ないし肉体観の変容は、教育理論の構築および教育実践の方針にも大きな影響を与えずにはおかない。

プラトン (Platon, ca. 428–347 B. C.) によれば、魂の現世における滞在先である身体は神性からの離反の帰結として一物理的に生成された一死すべきものであり、神との類似性の象徴として一形而上学的に存在する一永遠なものである魂に対置される。「魂としての人間にとっての唯一の脅威は、身体としての人間である」(König 1989, 27) というフレーズに凝縮される心身の二項対立図式は古代ギリシアを制した後、「わたしたちは、律法は霊的なものであると知っている。しかし、わたしは肉につける者であって、罪の下(もと)に売られているのである。[中略] わたしの肢体(したい)には別の律法があって、わたしの心の法則に対して戦いをいどみ、そして、肢体に存在する罪の法則の中に、わたし

をとりこにしているのを見る」(Rom. 7, 14–23) という聖書の一節に顕現するように、そのままキリスト教の人間観へと継承され、ヨーロッパ世界における教育理論および教育実践を長く規定していくことになる。

18 世紀のドイツで啓蒙主義の運動と連動して活動を展開した汎愛主義 (Philanthropinismus) 教育家たちは、魂を核とする人間理解に立ちながら、この魂に思考の材料を提供しその決定に従って行動する身体の役割を重要視する。この役割を果たしうる身体を形成するため、汎愛派は要素化・機械化という手法を凝らすことで身体教育プログラムを考案するが、それはグーツムーツ (Johann Christoph Friedrich Guts Muths, 1759–1839) によれば、「みずからの身体に対する合自然的な知にもとづく、目標指向的計画的、体系的組織的、規則的かつ反復可能な、個別的、孤立的、有機的、規範的な活動」(König 1989, 96) と総括されうるものである。プラトンの教育構想において魂の脅威として警戒されていた身体は、汎愛派の教育構想においてはこうして魂の奉仕者という新たな地位を獲得するが、身体が魂に下位づけられていたという事実にかんがみるならば、心と身体を一ことばの本来の意味で一協同させて人間形成に資するという発想からは旧態依然として遠く懸け離れたものであることがわかる<sup>1</sup>。

心と身体の二分法的枠組を前提とする「心を脅かす身体」ないしは「心に従う身体」という心身図式を克服し、心と身体を有機的な全体とみなす教育構想は新教育運動 (Reformpädagogik) の時代、すなわち 19 世紀から 20 世紀にかけての世紀転換期を待たなければならなかった。その推進力となったのは、ニーチェ (Friedrich Wilhelm Nietzsche, 1844–1900) が『ツァラトストラはかく語りき (Also sprach Zarathustra)』(1883–85) のなかで「わたしはまったき肉体であり、それ以外のなにものでもない。魂とは肉体に属するものを言い表す言葉に過ぎない」(Nietzsche 1968, 35) ということばで鮮烈に宣言した、心身を分割させることなくまるごとの生命として肉体を把握する立場である。ここに身体は心の本質を阻害ないし補助するものとしてではなく心をも包摂する生命を体現するものであるという新たな性状を付与されることになる。

ドイツ語には、「生命 (Leben)」を意味するゲルマン語から派生する Leib と、「物体 (corpus)」を意味するラテン語に由来する Körper が、ともに身体を意味する概念として共存している。語源に寄り添って解釈するならば、人間の身体が魂とのあいだに境界線を設けることなく生物的・有機的存在として「ひとつの全体としての生命」とみなされるときそれは Leib と呼ばれ、人間の身体が魂とのあいだに境界線を設けることで物質的・無機的存在として「生命のない物理的な容器」とみなされるときそれは Körper と呼ばれることになる<sup>2</sup>。新教育運動は身体概念的二元論という枠組において Leib を強く意識して心身問題と取り組むことを求められていたといえる。

筆者はこれまでいくつかの論文で新教育運動における身体論を扱ってきたが (伊藤 2005; 伊藤 2006; Ito 2006; 伊藤 2010 a; 伊藤 2010 b; 伊藤 2011; Ito 2011)、その関心の中心は新教育運動の身体論と生活改革運動の身体論との照応を解き明かすことにあった。本稿の目的は、新教育運動家たちが 19 世紀から 20 世紀にかけての世紀転換期に他の学問領域で展開された心身問題との取り組みと

<sup>1</sup> 汎愛派の教育構想の軸をなすのは、ケーニヒ (Eugen König) によれば、「魂の力を身体の中に固定し、暴力によらない攻撃で身体を無抵抗なものにし、身体という敵地のなかに一拠点を設置する状態へと魂を移し変える狡猾な手続き」(König 1878, 84) である。

<sup>2</sup> Leib という概念に対する Körper という概念の位置づけは、プレスナー (Helmut Plessner, 1892–1985) の人間学において明確に提示されている。プレスナーが「世界に開かれた」存在すなわち「脱中心的」存在としての人間を定義するとき、身体に対する人間の両義的関係がその根拠としてかけられる。すなわち、人間は自分の Leib で「あり」ながら Körper を「もつ」存在であり、身体に対して「存在」と「所有」という二重の関係を結ぶことによって、他の動物から区別されることになるのである (vgl. Haneberg 1995, 15 f.; Meier-Drawe 2000, 149)。

いかなる接点をもち、それが彼らの教育実践にいかん反映されているかという脈絡を、ドイツにおける新教育運動家たちにとってその理論構築に大きな影響を与えたと目される心身医学<sup>3</sup>そして生の哲学との関わりに注目して読み解くことにある。ドイツの新教育運動を代表するドイツ田園教育舎運動、そしてこの教育構想をより完成されたかたちで公立学校に提供することを目指して案出されたイエナ・プランを例として、この二様の教育実践がそれぞれどのように心身医学および生の哲学と共振しながら展開されたかを検証したい。

## 2. 世紀転換期における心身論

『ツァラトストラはかく語りき』のなかで身体ないし肉体への注視を喚起したニーチェは、心身二元論の相対化への突破口を模索する時代精神と呼応するかたちで様々な学問領域において新たな人間観・生命観に立脚する理論・実践の創出へと直接間接に寄与している。ニーチェの処女作である『悲劇の誕生 (Die Geburt der Tragödie)』(1872)には理性と秩序を象徴するアポロと陶酔と恍惚を象徴するディオニューソスが対照的に描き出されているが、ユング (Carl Gustav Jung, 1875–1961) の影響を受けてギリシア神話の新解釈を手がけたケレーニイ (Karl Kérenyi, 1897–1973)<sup>4</sup>は『ディオニューソス、破壊されざる生の根源像 (Dionysos. Urbild des unzerstörbaren Lebens)』(1976)のなかで、生を個体の生命としてのビオス (Bios) と、その底に広がっている生命一般—あらゆる個別的生命の源泉になっているような生命活動そのもの—としてのゾーエー (Zōē) に分け、ディオニューソスをもってゾーエーの化身とみなす。ケレーニイによれば、ビオスは「タナトス (死) に対置された特徴ある一回的な生」であり端的には「(特徴づけられた) 制約された生」と呼びうるものであり、ゾーエーとは「破壊を受け容れず遺伝子のように固体を越えて連続する生」であり端的には「(あまりはっきりと特徴づけのない) 無限なる生」と呼びうるものである (ケレーニイ 1993、14 f. ; 518 f. 参照)<sup>5</sup>。両者の関係を一連の真珠の首飾りにたとえてケレーニイは、「ゾーエーはビオスの 1 つひとつが真珠のように並べられる糸であり、この糸はビオスとちがってひたすら無限に連続する」(同書、19) と説明する。

ケレーニイのゾーエーとビオスという概念を新たな解釈を加えながら使用する木村敏<sup>6</sup>はゾーエーが「心身医学の父」と呼ばれるグロデック (Georg Walter Groddeck, 1866–1934) が生命の根源という意で用いたエスにも重なりと指摘する (木村 2008、164 ; 173 参照)。経験療法による温泉療養所を営む

<sup>3</sup> 野間俊一によれば、心身医学は精神生理学と精神分析学という二つの学問領域に軸足を置いているが、そこに横たわる要素主義・機械論・因果論への志向性という自然科学の桎梏を打破する可能性としては「第三の道」として経験療法の手法に期待が寄せられることになる (野間 2006、17 ff. 参照)。

<sup>4</sup> フレーベ=カプティン (Olga Froebe-Kapteyn, 1881-1962) が 1933 年に設立した一東西思想の対話、秘教的伝統の再評価、宗教と科学の架橋、深層心理学や形態学に基づく人間観などをテーマとする—エラノス会議の論客として、さらに『神話学入門 (Einführung in das Wesen der Mythologie)』(1941)の共著者としてすでにユングと親しかったケレーニイであるが、1943 年にハンガリーからスイスへと移住したことを機としてユングとの関係をさらに深め、1948 年にチューリヒにユング研究所が設立されるとその芸術主任研究員として着任している。

<sup>5</sup> ケレーニイによれば、どのような生物にも一方に生の本能と他方に死の本能が存在し、「ゾーエーは死の本能の前提であり、死もまたゾーエーと関係することによってのみ意味」をもち、「死はその時々々のビオスに含まれるゾーエーの産物」(ケレーニイ 1993、222) である。ディオニューソス神話はしたがって、「ゾーエーの現実、つまり魂にその実在が感得できるゾーエーの不滅を、さらにはゾーエーが死と独特な弁証法的関係にあること」(同書、249)を示唆している。木村はこれを受けて、「ゾーエー的な生即死の生死未分・自他未分の根源的一性が、アポロンのな<個体化の原理>に触れて個々の個別者に分離し、しかしその分離後もそれぞれの個別者に分有されて、各個体における生と死の人称的・非人称的な二重性を形成することになる」(木村 2009、39) と述べる。

父グロデック (Carl Theodor Groddeck, 1826–85) およびベルリン大学の皮膚科教授として経験療法を推進するシュヴェニンガー (Ernst Schweninger, 1850–1924) に師事することで、グロデックはみずからも当時の主流であった自然科学による近代医学からあえて距離をおく理学療法をかかげたサナトリウムを設立する。グロデックは、1917年にフロイト (Sigmund Freud, 1856–1939) への書簡のなかで、心身の区別を超えたところで「私たちがそれによって生きられているようなひとつの力」すなわちエスに言及し、1923年には「心身の根底にひとつの原理を仮定する」ことを説く『エスの本 (Das Buch vom Es)』を上梓している (野間 2006、29 参照)<sup>7</sup>。グロデックは人間に生じるあらゆる生命現象を「<エス>の現象形態」 (同書、190) とみなし、「あらゆる実体に普遍的に存在」するエスによって「たがいに影響を与えあいながら調和ある世界の形成」 (野間/グロデック 2002、309) が可能になると考える。心身を分離させない自己というこのエスのイメージには、ゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe, 1749–1832) の「神なる自然 (Gottnatur)」<sup>8</sup>、さらにニーチェの「肉体を軽蔑する者」 (『ツァラトストラはかく語りき』の第1部) からの影響がみられる (同書、285；303 参照)。

19世紀から20世紀にかけてドイツでは医学において自然科学が存在感を増すなか、心身不分離の力を生の根底にみとめる人間観・生命観を提示することでグロデックのなしたこの趨勢への異議申し立ては、心身医学の萌生を促し、さらに戦後にはこのグロデックの再発見に貢献したヴァイツェッカー (Viktor von Weizsäcker, 1886–1957) による哲学・心理学・神学を自然科学に関連づける医学的人間学 (medizinische Anthropologie) 提唱の端緒を拓いている<sup>8</sup>。

グロデックにみられる萌芽としての心身医学に着目したヴァイツェッカーが、19世紀から20世紀にかけての世紀転換期に強い影響力をもった生の哲学者のなかで注目しているのは、クラークス (Ludwig Klages, 1872–1956)<sup>9</sup>である<sup>10</sup>。クラークスは、身体のリズムと宇宙のリズムの共鳴をその根底にみる宇宙観を説くなかで、リズムによって身体の動きが生み出される過程においては心身の境界が解消され

<sup>6</sup> これは、アレント (Hannah Arendt, 1906–75) に触発されて社会的生であるビオスと生物的生であるゾーエーを対置して理解することを提唱して近年注目されているアガンベン (Giorgio Agamben) による理解とは異なる。アガンベンによれば、ゾーエーはすべての生物に共通な「生きているという事実」すなわち生物的な生、ビオスは「個人あるいは集団に特有な生の形式あるいは方法」 (Agamben 1998, 1) すなわち社会的政治的生である。これを小泉義之は単純化し、「生きるに値しない生命」というときに「生命」がゾーエー、「生きる」はビオスであると説明する。このようなゾーエーとビオスの対照を受けて金森修は、ゾーエーよりビオスのほうが根源的かつ重要な概念であるにもかかわらず、身体のリソース化という文脈のなかでゾーエーに過大な価値が付されつつある現状を憂慮している (小泉/金森 2005、30 f. 参照)。この見解は、ケレーニイのゾーエーとビオスの対照に立つ木村のそれとは異なる。すなわち、木村は、現代社会は生命から即ビオス的な生命を連想する現代社会に警鐘を鳴らし、ゾーエーへの想像力を求める (木村 2008、175 参照)。なお、木村は、形のあるアポロ的な世界を生きる個別的な生を小文字の bios、形のないカオス状のディオニューソス的な世界を生きる生を大文字の Bios と呼べるとする (同書、93 参照)。

<sup>7</sup> 一方、フロイトは同じ1923年に「エス」を一生を全面的に担う存在としてではなく「自我」「超自我」と並ぶ心的構造のひとつ、すなわち心の一部ないしは「リビドーの貯蔵庫」とみなす著書『自我とエス (Das Ich und das Es)』を刊行している (野間 2006、38；木村 1995 参照)。フロイトの「エス」概念の使用がグロデックの意に反したものであったことから、この著書の出版によってグロデックのフロイトへの不信感は決定づけられることになる (互 2010 参照)。

<sup>8</sup> ヴァイツェッカーがその論文を1950年に紹介したことを受けてグロデックは再度注目されることになり、生誕120年の1986年にはゲオルグ・グロデック協会が設立されている。

<sup>9</sup> クラークスは、近代文明を批判する立場から文化の内的な自然への回帰を提唱し、生気論派の心理学を主導した人物である。クラークスがシュラー (Alfred Schuler, 1865–1923) とともにミュンヘンのシュヴァーピングに立ち上げた「宇宙論サークル (Kosmische Runde)」は、ワンダーフォーゲルを母胎とする自由青年運動の精神的な拠り所となる。

<sup>10</sup> ヴァイツェッカーはクラークスから das Pathische という概念を継承し (vgl. Grätzel 1999, 97)、病気を「das Ontische に対する das Pathische の優越」 (ebd., 106) とみなしている。



生の全一性が回復されるという現象に注目し、心身に分割することのない全一としての生の現出により人間は意味に溢れた新たな生の根源へと回帰することができると主張する。人間と自然、そして心と身体をあいだを満たす一近代化・文明化の波のなかで喪失されたとされる一全一性を取り戻す手がかりは、こうして世紀転換期に生の哲学が描き出す人間観・生命観に導かれ、みずからの身体に宿るリズムと宇宙に宿るリズムに浸されるという一ときに神秘的な響きをともしう一体験に求められることになり、その延長線上に「生命を決定づける原理」そして「あらゆる存在の基底」として発見された「リズム」を核概念とする身体文化が生起する。身体文化運動（Körperkulturbewegung）の推進者は新しい身体性の獲得を具体化するために「リズム」を標語とする体操および舞踊の理論化実践化に取り組み、この動きは新しい身体性を希求していた芸術活動および教育活動とも連動し、強い影響力をもつ時代精神を形成していく。

ギリシア語の *rhythmos*（流れる）に由来する「リズム」は、ベルクソン（Henri Louis Bergson, 1859–1941）やクラークスに代表される 20 世紀の生の哲学において、生命現象そのものを表す概念として用いられる。彼らの概念理解にしたがえば、自然のなかに本来的に宿り不断に持続的な（*ununterbrochen stetig*）ものとして流れる（*fließend*）「リズム（律動）」（Klages 1944, 26）は生命の脈動に通じるものであり、精神作用が現象を分節した結果として生じる「タクト（拍子）」に鋭く対置される。ラテン語の *tactus*（触れる）から派生する「拍子」は、メトロノームの生み出す「機械的な均等」、「硬直した形式」に象徴されるように一「リズム」とは対照的に一生命の脈動を減衰させるからである。精神と魂の調停を身体に委ねる生氣論的主張を展開するクラークスの表現にしたがえば、「生命の表出（*Lebenszugehörigkeit*）」である「リズム」とは「類似したもの（*das Aehnliche*）」の絶えざる「更新（*Erneuerung*）」を伴う「再帰（*Wiederkehr*）」であり、「精神の所産（*Geisteszugehörigkeit*）」である「拍子」は逆に「同一のもの（*das Gleiche*）」の「反復（*Wiederholung*）」（Klages 1944, 52）にすぎない。ただし、生命に対立する「拍子」にはほかならぬこの対立をもって魂の「リズム振動（*rhythmische Schwingungen*）」を増幅させ生命を活性化させるという側面も存在する（*ebd.*, 86）。

「リズム」を体験する前提は、抑制からわれわれを解放する「感動（*Ergriffenheit*）」である。たとえば、リズムの脈動に乗って踊ることができる時、そこには感動が存在する（*ebd.*, 92）。身体はこのようなかたちで魂に関与することによって、「肉体のもつ今ここで（*leibliches Hier und Jetzt*）」（*ebd.*, 95）という境界線を越え出て世界との溶解体験を果たすことが可能となる。こうしてクラークスの生の哲学は、19 世紀から 20 世紀にかけての世紀転換期のドイツにおいて、近代化・文明化の過程で失われたと想定される生の全一性を身体ないし肉体を拠点として回復しようとする時代精神を活性化させ、さらに有機的存在である人間のもつ生命の表出であるリズムを核とする教育の推進へと具体化されていく。

### 3. 心身の接点を意識化する教育実践

19 世紀から 20 世紀にかけての世紀転換期において心身の分離ではなく心身の融合を基調とする人間観・生命観が台頭してきたことを背景として、教育理論の構築および教育実践の方針にも改変が促されることになる。ドイツにおいて新教育運動の代表格とされるドイツ田園教育舎運動の教育実践、さらに田園教育舎の発想を公的な領域で生かすことを目指したイエナ・プランの教育実践に着目し、時代精神としての新たな心身論がどのように取り込まれていったかを検討する。

#### 3. 1. ドイツ田園教育舎運動の場合

リーツ（Hermann Lietz, 1868–1919）は、レディ（Cecil Reddie, 1858–1932）の運営するイギリス

のアボツホルム校 (Abbotsholme) から得た知見をもとに、ドイツ田園教育舎運動 (Deutsche Erziehungsheim-Bewegung) を興し、ドイツにおける新教育運動の嚆矢とする。大都市から遠く離れた「田園 (Land)」に知育に特化された学校でなく全人的発達を目指す「教育 (Erziehung)」を提供する寄宿「舎 (Heim)」が、1898 年には初級教育施設となるイルゼンブルク (Ilsenburg) に、1901 年には中級教育施設となるハウビンダ (Haubinda) に、1904 年には上級教育施設となるビーバーシュタイン (Bieberstein) に誕生し、改革を志向する同時代の教育者たちに基準となるモデルを提供することになる。

ドイツ田園教育舎の設立趣旨書の目標としてかけられたのは「性格形成 (Charakterbildung)」であるが、その有効な手段としてリーツが具体的に重視したのは祭典である。「倫理的宗教的な、そして愛国的な意識を育成するための特別な行事」を総称する「カペレン (Kapellen)」をリーツは教育舎における活動の中心に位置づけ、この行事の枠組のなかで「毎日の朝夕の礼拝、(森での、星空の下での遠足といった) 荘重な機会を通じての宗教的発達、記念日の式典、あらゆる授業科目における、とりわけ自然科学・歴史における宗教的倫理的なものの強調、詩歌と芸術の育成」(Lietz 1970, 32) が実施された。ドイツ皇帝ヴィルヘルム 2 世 (Wilhelm II, 1859–1941) を窮状にあるドイツの救世主とみなして崇拜することを推進していたリーツは (vgl. Petersen 1926, XXIV)、その誕生日を祝福する祭典を「カペレン」のクライマックスとして機能させていた。

ゲヘープ (Paul Geheeb, 1870–1961) は、1892 年にイエナ大学で開講されたリプシウス (Richard Adalbert Lipsius, 1830–92) の宗教哲学演習で出会い、フィヒテ (Johann Gottlieb Fichte, 1762–1814) の教育理想を実現するという志で意気投合したリーツ (vgl. Schäfer 1960, 14) に誘われ、1902 年からリーツの設立したハウビンダ校で教鞭をとったことを手始めとして、1906 年にはヴィネケン (Gustav Wyneken, 1875–1964) と設立したヴィッカーズドルフ自由学校共同体 (Freie Schulgemeinde Wickersdorf)、1910 年には妻エディット (Edith Geheeb-Cassirer, 1885–1982) と設立したオーデンヴァルト校 (Odenwaldschule)、さらにナチスの手を逃れて設立したエコール・デュマニテ (Ecole d'Humanité) と 4 つの田園教育舎の教育活動にたずさわっている。しかし、ゲヘープの教育観はドイツ田園教育舎運動の祖であるリーツのハウビンダ校へ赴任する以前、精神病質児を対象とする施設で生活しながら教育に従事するという一強烈な印象を残す一体験によってその大枠が決定していたという事実は注視に値する。

ゲヘープは聖職者の資格を獲得するために神学に重きをおく大学生活を送っていたが、1893 年から 1894 年にかけてはトリューパー (Johannes Trüper, 1855–1921) がビンスヴァンガー (Otto Binswanger, 1852–1929)<sup>11</sup> の依頼を受けて 1890 年にゾフィエンヘーエ (Sophienhöhe) に設立した「精神病質児のための施設」で働くことになり、この体験は教育に関わる原体験としてその後の人生の歩みにも大きな変化をもたらしている。ゾフィエンヘーエでの活動を契機として、ゲヘープは大学で博士論文のための研究よりも生理心理学の勉強を優先させ、とりわけヴェント (Wilhelm Max Wundt, 1832–1920) やツィーエン (Theodor Ziehen, 1862–1950) に没頭し始め (vgl. Näf 1998, 151)、ゾフィエンヘーエを辞した後も、イエナ大学でライン (Wilhelm Rein, 1847–1929) の演習を受講するかたわら、ビン

<sup>11</sup> ビンスヴァンガーの父 (Ludwig Binswanger, 1820–80) は自らの家族と患者がともに生活する「治療力のある共同体」として 1857 年にボーデン湖畔のクロイツリンクにベルビュー療養所を設立し、この療養所を三代目として引き継いだビンスヴァンガーの甥 (Ludwig Binswanger, 1881–1966) は、精神分析と実存哲学を結びつけた「現存在分析 (Daseinsanalyse)」を提唱して有名になっている。なお、スイスに移住したゲヘープはビンスヴァンガーのこの著名な甥にも 1939 年にルツェルンで開催された心理学の講習会で会っている (vgl. Näf 2006, 553 f.)。

スヴァンガーの「癲癇とヒステリー」やツィーエンの「脳病理学」を受講しており（vgl. ebd., 159）<sup>12</sup>、当時の心身問題への取り組みの一端を心理学および精神医学の視点から学んだことが推測される。ゲヘープは臨床医としてとりわけ児童・青年を対象とする精神医学の名声を得ていたビンスヴァンガーの授業から強い感化を受け、ビンスヴァンガーが主宰する集まりにも足を運んでいた。

ゲヘープが学生時代に触れた心身論の知見は、みずからの設立した田園教育舎における教育実践の随所に反映されている。オーデンヴァルト校における一日の日課は「起床、森のなかの耐久競走、冷水のシャワー」（Mann 1967, 177）によってスタートするが、特記されるのは午前中の休憩時間に小高い丘の上の垣で囲われた草地のなかで全裸で徒手体操をしながら行われる空気浴（Luftbad）ないしは光線浴（Lichtbad）である（vgl. Mann 1967, 177; Venn 2008, 94; Kroner 2008, 160; Gassner 2008, 165）。オーデンヴァルト校で1915年から4年近く教員を務めたヒュグナン（Elisabeth Huguenin, 1885–1970）は「空気浴は一ダンスと同様に一体育と同時に徳育の観点から重要である」と述べ、裸体のトレーニングが身体への畏敬を育むために有効であったと回想する。晴れの日も雨の日も雪の日も行われる裸体のトレーニングは、ひとつには身体を鍛えあらゆる病気の予防に貢献したが、いまひとつには心の清浄にも貢献したのである（vgl. Huguenin 1926, 15）。オーデンヴァルト校の年中行事として行われるスキー（vgl. Mann 1967, 190）、春と秋にそれぞれ6日間ないし8日間行われる徒歩旅行（vgl. Huguenin 1926, 12; Mann 1967, 191; Venn 2008, 96）もまた、単なる身体教育としてではなく、自由な身体活動を介して自然と心を交流させるという教育的意味を付加して理解されていた。

オーデンヴァルト校では日曜日の礼拝（Andacht）が行われていたが、そこでは宗派の教義を提示することではなく、あらゆる宗教的人物の偉業を生き生きと語ることによって教育舎の生活を宗教性に浸すことが目指された（vgl. Huguenin 1926, 56）。ゲヘープは中級の生徒への宗教教授をみずから行ったが、それはプロテスタント教徒、カトリック教徒、イスラム教徒を前に聖書についての対話を進めるかたちで実施された。エコール・デュマニテでも日曜日の礼拝は受け継がれるが、「観照的時間」として位置づけられるこの集まりにおいては朗読や演劇や寸劇が催され、その題材は一特定の宗派に縛られない一宗教、政治、みずからの体験のなかから選び取られる。ゲヘープは好んでトルストイ（Aleksy Konstantinovich Tolstoy, 1817–75）の民話とラーゲルレーヴ（Selma Lagerlöf, 1858–1940）の伝説を朗読したという（vgl. Mann 1967, 178; Venn 2008, 99; Gassner 2008, 168）。陶冶上、礼拝と同様に観照的作用をもたらす場としては、土曜日にさまざまな文化圏で生まれたさまざまな言語の歌を200名で歌う合唱集会（Singgemeinde）も大きな役割を果たしている。ゲヘープの祝祭はしかし多くのドイツ田園教育舎運動家とは対照的に一キリスト教的雰囲気染め上げられていたわけではない。ゲヘープの宗教性への関心は妻エディットの影響から東洋的な宗教性にも開かれており、1920年代から1930年代にかけて東西交流の立役者と目されたインドの詩人タゴール（Rabindranath Tagore, 1861–1941）が1921年にダルムシュタット在住のーグローデックの友人でもあった一哲学者カイザーリング（Hermann Alexander Graf Keyserling, 1880–1946）<sup>13</sup>のもとに滞在していたときにはこの客人をオーデンヴァルト校に招待している。

オーデンヴァルト校における最大のイベントは、ゲヘープがみずからの学校の「庇護者」（Huguenin 1926, 71）とみなしたドイツの5大偉人一ゲーテ、ヘルダー（Johann Gottfried von Herder, 1744–1803）、シラー（Johann Christoph Friedrich von Schiller, 1759–1805）、フィヒテ、フンボルト（Wilhelm von Humboldt, 1767–1935）一の誕生日に繰り広げられた。オーデンヴァルト校の5つの建物にはそれぞ

<sup>12</sup> ツィーエンはビンスヴァンガーがイエナで運営していた精神病院に勤めていた。この精神病院はニーチェを診察したことで有名であるが、直接に担当したのはツィーエンであった（vgl. Näf 1998, 151）。



れこの5人の名前が冠せられ、本館には5人の肖像画が掲げられていたが、5人の誕生日にはその業績を称える演劇を上演するなど、心身を総動員させた祭典が催された (vgl. Geheeb 1933, 5)。

なお、ゲヘーブがリーツの学校で知り合い、1906年には共同してヴィッカーズドルフ自由学校共同体を設立することになるヴィネケンは、ドイツ青年運動に深くかかわることで早くから身体性に対する関心を持ち、たとえばホーエ＝マイスナー祭における舞踏を「若者にみずからの身体を再発見する道を開くもの」(Wyneken 1920, 156)として評価している。ヴィネケンによれば、若者は「身体性原則の担い手」、「身体感情の担い手」(ebd., 155)であり、したがって、ヴィネケンの教育実践はこの「身体感情」を育成することを要として構想されることになる。

### 3. 2. イエナ・プランの場合

ペーターゼン (Peter Petersen, 1884–1952) は、イエナ・プラン (Jena-Plan) の構想には直接にはみずからのハンブルク生活共同社会学校の経験とならんで、「1912年秋のアンマーゼー田園教育舎訪問、1922年のドイツ田園教育舎研究」(Petersen 2007, 19)がその素地となったと述懐している。田園教育舎設立者のなかでもとりわけペーターゼンが親しくしていたことが知られているのはゲヘーブである。1926年にヒュグナンが上梓した『オーデンヴァルト校 (Die Odenwaldschule)』にペーターゼンが寄せた長い序文からは、ペーターゼンがゲヘーブの創設したこの学校に強い関心をもっていたことがうかがえる。

イエナ大学に学んだディートリッヒ (Theo Dietrich, 1917–2003) は、教育科学と哲学の連関を説く授業でクラークスの宇宙論やドリーシュのエンテレヒー概念<sup>14</sup>に言及するペーターゼンはまさに水を得た魚のようであったと回想している (vgl. Dietrich 1986, 14)。生の哲学および生氣論派の心理学を主導したクラークスと因果性を超えた生物の生命原理であるエンテレヒーを核概念として新生氣論を提唱したドリーシュはいずれも心身二分法に抗する時代精神の担い手であった。「生命への畏敬」による授業を行う学校は「第一の価値を健康な生徒におき、＜学校の日常＞を健康にし、民族力を増強しようと努める」(Petersen 2007, 56)べきであると考えたペーターゼンは、クラークスの生氣論に共鳴する生活

<sup>13</sup> カイザーリングは1911年にインドでタゴールと知り合って以来、タゴールをドイツ語圏に紹介する中心的な役割を担っていた。また、カイザーリングは1924年以降、グロデックと親しく交流しており、グロデックの追悼文には「私の知る者のなかで、会うたびに老子を思い起こさせたのは彼以外にいない。彼の無為はまことに驚嘆すべき創造の源だった」(野間／グロデック 2002, 18)と回顧している。なお、カイザーリングが1920年にダルムシュタットに創設した「知の学校 (Schule der Weisheit)」にはタゴール以外にも分析心理学の創始者ユング、哲学的人間学の提唱者シェラー (Max Scheler, 1874–1928)、神学および中国研究の大家ヴィルヘルム (Richard Wilhelm, 1873–1930)、民俗学および神話学の権威フロベニウス (Leo Frobenius, 1873–1938)、日露戦争を題材とする小説で有名なティース (Frank Thieß, 1890–1977)、新生氣論の旗手ドリーシュ (Hans Driesch, 1867–1941)ら時代精神を代表する人々が集う一方で、評論家トゥホルスキー (Kurt Tucholsky, 1890–1935)、人智学の創始者シュタイナー (Rudolf Steiner, 1861–1925)、哲学的著述家ブリューアー (Hans Brühner, 1888–1955)、クラークスの批判を受けていた。

<sup>14</sup> エンテレヒー (Entelechie) はアリストテレス (Aristoteles, 381–322 B.C.) の「完全現実体」を意味するエンテレケイア (entelecheia) に遡る概念であるが、ペーターゼンの時代にはドリーシュによって唱えられた新生氣論の文脈であらためて注目されていた。イエナ大学に学んだドリーシュは当初、ダーウィン (Charles Robert Darwin, 1809–1882)、ラマルク (Jean-Baptiste de Monet Lamarck, 1744–1829)、ゲーテに依拠して一機械論的唯物論と観念論をあわせもつ一独自の進化論を打ち立てたヘッケル (Ernst Heinrich Haeckel, 1834–1919) の影響を受けていたが、ウニ卵を材料として実験発生学を研究するなかで調和等能性を発見し、これを因果性を超えた生物の生命原理すなわちエンテレヒーを根幹概念として用いて説明した。『生氣論の歴史 (Geschichte des Vitalismus)』(1905)、『身体と精神 (Leib und Seele)』(1916)、『超心理学 (Parapsychologie)』(1932)など一連の影響のある著作を発表し、生誕80年となる1947年にはレーゲンスブルクにドリーシュ協会が設立されている。なお、ドリーシュはナチス政権下にあってもその妥協的態度によって知られる。



改革運動家たちにも浸透をみた「水浴、日光浴、空気浴」(ebd.)の実践を推奨している。自然療法と称されるこれらの実践の背景には、心身を分割させることなくまるごとの生命として把握しようとする19世紀から20世紀にかけての世紀転換期に特徴的な心身問題との取り組みが横たわっていたといえる。

学校生活のなかで最高の事実である神との出会いを求めるという視点 (vgl. Koerrenz 1997, 488; Koerrenz 2003, 149; Kliss 2001, 76) からは、「美術・文学・習俗・言語とならぶ民族文化の一領域」(Petersen 1934, 249) とみなされる宗教が重要となるが、イエナ・プランにおいては「宗教を含むすべての授業は教科単位ではなく、活動単位である4つの領域—談話 (Gespräch) ・遊戯 (Spiel) ・作業 (Arbeit) ・祭典 (Feier) —を循環させるかたちで一週間サイクルのリズムをもって行われる。したがって、イエナ・プランにおいては文化という枠組から取り上げたテーマを扱う2時間1コマの授業時間に宗教から影響された美術・文学・民族史・宗教生活の英雄・殉死者を取り上げることで実質的に宗教が教授された。4つの活動領域ではそれぞれ神との出会いを援助することを目的として、聖史劇・祭典劇の上演 (以上、遊戯の領域)、田畑の耕作といった自然への働きかけ、隣人・被造物・人間世界への奉仕の実施 (以上、作業の領域)、対話や歌や祈り (以上、談話および祭典の領域) と心と身体との協同を配慮した教育内容が用意された。

ペーターゼンが学校生活のなかでとりわけ大切にしたのはドイツ田園教育舎運動家たちと同様に「祭典であり、とりわけ一週間の始まりと一週間の終わりに催されるそれは重みをもっていた。月曜日の朝の祭典は最長で50分にわたる行事で、「国旗掲揚、国歌斉唱、ペーターゼンのことば」(Retter 2007, 472) で構成され、二重ないし三重の馬蹄形に椅子を並べた形態で開催されるが、ペーターゼンの話題はグーテンベルク (Johannes Gutenberg, 1397–1468)、バッハ (Johann Sebastian Bach, 1685–1750)、ゲーテ、ルター (Martin Luther, 1483–1546) といったドイツの偉人を引き合いに出す英雄譚が多かった。火曜日以降の日課は短い共同の祭典ではじまり、この祭典のなかでは民謡が歌われドイツの詩人のことばが読み上げられた。一週間のしめくくりである土曜日には長めのキリスト教による学校祭典が挙行された。低学年学級には副牧師が来校して福音をわかりやすく話してくれ、中学年・高学年学級では「週末の祈り (Wochenschlußandacht)」として「賛美歌と聖書のことばについての話」がなされた。当初ミースケス (Hans Mieskes, 1915–2006)<sup>15</sup> によって担われ、後にはペーターゼンみずからが担うことになったこの祭典では、歌が歌われ、祈りによって締めくくられた。祭典のもつ教育効果は保護者の参加をえてさらに高まるとするペーターゼンの理解から、学校の四大年間行事とされる「入学式、卒業式、キリスト降誕祭、教育のふりかえり」<sup>16</sup> には保護者も招かれ、校歌の斉唱とともに盛大に執り行われた。

#### 4. おわりに

19世紀から20世紀にかけての世紀転換期に心身を分離しない全一の生を実現するための身体文化運動を牽引し「イエナ・プランにそのラバン体操が導入されるなど」新教育運動家たちの教育実践にも多大な影響力を発揮した舞踊家ラバン (Rudolf von Laban, 1879–1958) は、その主著『舞踊家としての世界 (Die Welt als Tänzer)』(1920) のなかで、「人間は祝祭へと教育されなければならない」と宣言する。この宣言は、「人間が有するリズム的なものへの憧憬」を強化することでここから「自らの祝祭

<sup>15</sup> ミースケスはデップ＝フォアヴァルト (Heinrich Döpp-Vorwald, 1902–77) と肩をならべるペーターゼンの弟子であるが、のちにそれぞれギーセンとミュンスターを拠点としてペーターゼン研究に関してライバル関係となる (vgl. Schwan 2007, 150)。

<sup>16</sup> キリスト降誕祭にはキリスト降誕劇が催され、この祭典前の2～3週間は学校全体が準備にかかりきりになる。教育のふりかえりには、過去1年間の作品が展示され、訪れた保護者の閲覧に供される (vgl. Retter 2007, 474)。

への希求からスタートする芸術的な文化総体へと自己形成」(Laban 1920, 129) する道が拓けるという、同時代の心身論を踏まえた人間観・生命観の文脈からの理解が可能である。

心身医学および生の哲学の追い風を受けて推進された祝祭ないし祭典を軸とする教育実践はしかし、生命の表現としてのリズムの絶対視に象徴される有機体としての生命の強調ゆえに、人間形成を民族・国家といった共同体に回収させ民族主義や国家主義の色調を帯びた全体主義に陥りやすいという傾向を胚胎するものであった。心身医学の礎にもなるエスの概念を提起したグロデックは国家社会主義の時代と深く関わることなく世を去るが、生の哲学を牽引したクラーゲスは国家社会主義の政権を擁護する理論的土壌を提供することになる。これらの学問分野における心身論を反映させた教育実践を行った新教育運動家たちの学校もまたこれに類似した運命をたどることはすでに多くの研究者によって指摘されているところである。

その一方で、19世紀から20世紀にかけての世紀転換期の心身論を考察するに際しては、心身を分割させることなくまるごとの生命として肉体を把握する立場と国家社会主義を支持する立場が必ずしも一致していないという事実も注視されなければならない。クラーゲスの生氣論を発展的に継承したドリーシュはこれまで国家社会主義思想の流れに位置づけられてきたが、近年、この位置づけはドリーシュの思想を援用して国家社会主義的理論の強化に協力したゲーレン (Arnold Gehlen, 1904–1976) の主張にすぎず、ドリーシュ自身は秩序一元論の前提とする秩序に反するものとして国家社会主義を公然と批判していた事実が指摘されている (米本 2007 参照)。新教育運動にあっても、その依拠する心身論と政治理念との連関は、それが当の新教育運動家によって主張されたものであるか、あるいはその協力者ないし継承者によって主張されたものであるかという厳密な検討を含めて改めて考察されなければならない。

\* 本稿は平成23年度科研基礎研究 (C) 課題番号 21530797 の研究成果の一部である。

## 【文献】

- Agamben, Giorgio (1995/1998): *Homo Sacer. Sovereign power and bare life*. Stanford: Stanford University Press  
 [ジョルジョ・アガンベン著 高桑和巳訳 ホモ・サケル, 主権権力と剥き出しの生, 東京: 以文社 2003]
- Dietrich, Theo (1986): *Die Pädagogik Peter Petersens. Der Jena-Plan: Modell einer humanen Schule*. Bad Heilbrunn/Klinkhardt
- Driesch, Hans (1914): *The History & Theory of Vitalism*. London: Macmillan [ハンス・ドリーシュ著 米本昌平訳 生氣論の歴史と理論, 東京: 書籍工房早山 2007]
- Gassner, Helga (2008): *Odenwaldschule (1929–1935)*. In: *odenwald schule. OSO-HEFTE. Neue Folge 19. Die Odenwaldschule in der Weimarer Republik*, 163–177
- Geheeb, Paul (1933): *Brief an Eduard Spranger vom 9. August*
- Grätzel, Stefan (1999): *Die Bedeutung von Ludwig Klages für die Medizinische Anthropologie*. In: Michael Grosheim (Hrsg.): *Perspektiven der Lebensphilosophie. Zum 125. Geburtstag von Ludwig Klages*. Bonn: Bouvier Verlag, 97–107
- Groddeck, Georg (1923/1992): *Das Buch vom Es. Psychoanalytische Briefe an eine Freundin*. Frankfurt am Main [ゲオルグ・グロデック著 岸田秀/山下公子訳 エスの本, 無意識の探求, 東京: 誠信書房 1991]
- Haneberg, Björn (1995): *Leib und Identität. Die Bedeutung der Leiblichkeit für die Bildung der sozialen Identität*. Würzburg: Ergon Verlag
- Huguenin, Elisabeth (1926): *Die Odenwaldschule*. Weimar: Hermann Böhlau Nachfolger
- 伊藤敏子 (2005): 新教育運動における身体性の問題, 東洋的宗教性への憧憬, [三重大学教育学部研究紀要 第56

- 卷, 279–288]
- 伊藤敏子 (2006): ドイツ生活改革運動の身体教育から日本の学校教育が学んだもの. 玉川学園における舞踊教育を軸として. [三重大学教育学部研究紀要 第 57 卷, 153–169]
- Ito, Toshiko (2006): Reformpädagogik aus dem Osten? Körperauffassung und Körpererziehung. In: Paedagogica Historica 42, 93–107
- 伊藤敏子 (2010 a): ペーターゼン教育学における心身問題の射程. イエナ・プランにみる心と身体の接点から. [三重大学教育学部研究紀要 第 61 卷, 167–179]
- 伊藤敏子 (2010 b): 田園教育舎と心身問題. オーデンヴァルト学校からエコール・デュマニテへの推移に注目して. [人間形成と文化 第 7 号, 181–186]
- 伊藤敏子 (2011): 新教育における心身論と教育愛の連関. オーデンヴァルト学校設立 100 周年に寄せて. [三重大学教育学部研究紀要 第 62 卷, 257–267]
- Ito, Toshiko (2011): Das Kaiserbildnis und die Förderung der nationalen Gesinnung. Eine Fallstudie zu Erziehungsmaterialien in japanischen Schulen zwischen 1890 und 1945. In: Pädagogische Rundschau 65 (5), 577–589
- Kerényi, Karl (1976): Dionysos. Urbild des unzerstörbaren Lebens. München/Wien: Georg Müller Verlag [カール・ケレーニイ著 岡田素之訳 ディオニューソス. 破壊されざる生の根源像. 東京・白水社 1993]
- 木村敏 (1995): エスについて—フロイト、グロデック、ブーバー、ハイデッガー、ヴァイツゼッカー— [思想 6 月号 4–24]
- 木村敏 (2008): 臨床哲学の知. 臨床としての精神病理学のために. 東京: 洋泉社
- 木村敏 (2009): 生命・身体・自己. 統合失調症の病理と西田哲学. [文明と哲学 第 2 号, 29–43]
- Klages, Ludwig (1923/1944): Vom Wesen des Rhythmus. Zürich/Leipzig: Verlag Gropengiesser [ルートヴィヒ・クラゲス著 杉浦実訳 リズムの本質 みすず書房 1971]
- Kliss, Oliver (2001): Luthers Urenkel in Jena. Religion in der Pädagogik Peter Petersens. In: Ralf Koerrenz/Willi Lütger (Hrsg.): Jena-Plan. Über die Schulpädagogik hinaus. Weinheim/Basel: Beltz, 71–81
- Koerrenz, Ralf (1997): Die Jena-Plan-Schule als liturgische Inszenierung. In: Vierteljahrschrift für wissenschaftliche Pädagogik 73, 487–500
- Koerrenz, Ralf (2003): Evangelium und Schule. Studien zur strukturellen Religionspädagogik. Leipzig: Evangelische Verlagsanstalt
- König, Eugen (1989): Körper-Wissen-Macht. Studien zur historischen Anthropologie des Körpers. Berlin: Dietrich Reimer Verlag. [オイゲン・ケーニヒ著 山本徳郎訳 身体—知—力. 身体の歴史人類学的研究. 東京: 不昧堂出版 1997]
- 小泉義之・金森修 (2005): いのち、ゾーエーとビオスの狭間で. [談 Speak, Talk, and Think. No. 74, 27–56]
- Kroner, Dodo (2006): Erinnerungen an die Odenwaldschule (1929-1932). In: odenwald schule. OSO-HEFTE. Neue Folge 19. Die Odenwaldschule in der Weimarer Republik, 157–162
- Laban, Rudolf von (1920): Die Welt als Tänzer. Fünf Gedankenreigen. Stuttgart: Walter Seifert
- Lietz, Hermann (1898/1970): Die Erziehungsgrundsätze des Deutschen Landerziehungsheims von Dr. H. Lietz bei Ilsenburg im Harz. In: Schulreform durch Neugründung. Ausgewählte pädagogische Schriften (Besorgt von Rudolf Lassahn). Paderborn: Schöningh
- Mann, Klaus (1967/2000): Kind dieser Zeit. Reinbeck bei Hamburg: Rowohlt
- Meyer-Drawe, Käte (2000): Die Not der Lebenskunst. Phänomenologische Überlegung zur Bildung als Gestaltung exzentrischer Lebensverhältnisse. Fünf Überlegungen. In: Cornelia Dietrich/Hans-Rüdiger Müller (Hrsg.): Bildung und Emanzipation. Klaus Mollenheuer weiterdenken. Weinheim/München, 147–154
- Näf, Martin (1998): Paul Geheeb. Seine Entwicklung bis zur Gründung der Odenwaldschule. Weinheim: Deutscher Studien Verlag
- Näf, Martin (2006): Paul und Edith Geheeb-Cassirer. Gründer der Odenwaldschule und der Ecole d'Humanité. Deutsche, Schweizerische und Internationale Reformpädagogik 1910–1961. Weinheim/Basel: Beltz



- Nietzsche, Friedrich (1883-85/1968): Also sprach Zarathustra. Ein Buch für Alle und Keinen. In: Nietzsche Werke. Kritische Gesamtausgabe (Begründet von Giorgio Colli / Mazzino Montinari). Sechste Abteilung. Erster Band. Berlin: de Gruyter
- 野間俊一／グロデック、ゲオルグ (2002): エスとの対話. 心身の無意識と癒し. 東京・新曜社
- 野間俊一 (2006): 身体の哲学. 精神医学からのアプローチ. 東京・講談社
- Petersen, Peter (1926): Die Stellung des Landerziehungsheims im Deutschen Erziehungswesen des 20. Jahrhunderts. Ein typologischer Versuch. In: Elisabeth Huguenin (1926): Die Odenwaldschule. Weimar: Hermann Böhlau Nachfolger, V-XLIX
- Petersen, Peter (1934/1994): Dienst an der religiösen Erziehung in der Schule. Einordnung der religiösen Wirklichkeit in die Arbeitswelt der Schüler. In: Ralf Koerrenz/Novert Collmar (Hrsg.): Die Religion der Reformpädagogik. Ein Arbeitsbuch. Weinheim: Deutsche Studien Verlag, 247–252
- Petersen, Peter (1927/2007): Der Kleine Jena-Plan. Weinheim/Basel: Beltz
- Retter, Hein (2007): Reformpädagogik und Protestantismus im Übergang zur Demokratie. Studien zur Pädagogik Peter Petersens. Frankfurt am Main: Peter Lang
- Schäfer, Walter (1960): Paul Geheeb. Mensch und Erzieher. Stuttgart: Ernst Klett
- Schwan, Torsten (2007): Die Petersen-Rezeption in der Bundesrepublik Deutschland 1960 bis 1984. Die Jenaplan-Pädagogik zwischen „defensiver Rezeption“ und einsetzender „Petersen-Kritik“. Frankfurt am Main: Peter Lang
- 互盛央 (2010): エスの系譜. 沈黙の西洋思想史. 東京・講談社
- Venn, Arthur (2008): Erinnerungen an die Odenwaldschule (1923–1925). In: odenwald schule. OSO-HEFTE. Neue Folge 19. Die Odenwaldschule in der Weimarer Republik, 80–101
- Wyneken, Gustav (1920): Der weltgeschichtliche Sinn der Jugendgewegung. In: Wyneken, Gustav: Der Kampf für die Jugend. Gesammelte Aufsätze. Jena: Eugen Diederichs Verlag, 149–170.
- 米本昌平 (2007): ハンス・ドリーシュの業績とその歴史上の位置. [ドリーシュ著 生氣論の歴史と理論 所収]